

B-19 溶剤洗浄における再汚染 (V) 被洗布に付着した油性汚垢

広島大教育 ○藤谷 健 岡山大学教育 杉原 繁子 広島大教育 藤井 清子

目的 溶剤洗浄における再汚染の機構を解明することを目的とした研究の一環として、使用中の洗浄液に含まれている汚垢成分（液中汚垢成分）と、その中に試験布を浸漬したとき付着する汚垢成分（付着汚垢成分）との関係を、特に油性汚垢について、検討した。

方法 福山市内のクリーニング店より使用中のパークロルエチレン洗浄液を採取し、溶媒を溜去して得た残渣、および、洗浄液中に一定時間浸漬した羊毛布から、エチルエーテルで抽出し、溶媒を溜去して得た残渣を試料とした。各汚垢は、薄層クロマトグラフィ、カラムクロマトグラフィ、ガスクロマトグラフィ、赤外線吸収スペクトルなどの手法を用いて分析を行なった。

結果 ①液中の油性汚垢量と被洗布への付着量との関係は、モデル汚れを用いて実験した第Ⅳ報の結果とほぼ一致している。②付着汚垢成分は、定性的には、液中汚垢成分とほぼ同様で、炭化水素、ステリンエステル、トリグリセリド、脂肪酸、高級アルコール、ステリン、ジグリセリド、モノグリセリドの存在が推定された。③液中汚垢成分を分析した結果、定性的な相違は認められないが、極性物質の含有割合から2つの型に大別されることがわかった。